

「放射線科における食欲不振について」

中6階病棟 発表者 紅谷 順子

上条 サワミ・赤羽 千春・百瀬 香絵子・小林 鈴枝
吉村 照・小松 英子・伊藤 広子・宮沢 はる子
上条 八重子

研究期間 S 53年9月6日～S 54年3月31日

〈はじめに〉

放射線による治療が増えてきた今日、放射線治療を受ける患者の多くに放射線障害が現れる。それは、皮膚の発赤、掻痒、脱毛などの局所症状と倦怠感、頭痛、悪心、食欲不振などの全身症状とに分けられる。反応の程度は個々様々であるが、放射線の感受性によっても異なり、五感には感じ取れないものと考えられているにもかかわらず、患者によっては「電気のやけるような臭いがする。」と言った訴えをする人もいる。全身症状の出現する原因は精神的因子も大きく関与すると考えられているが、まだ明確ではない。

私たちは、放射線治療中の患者を看護していく中で、それらの放射線障害についてはあたりまえの事としてとらえている事が少なくない。特に放射線治療をすすめていく上で体力の保持増強のために一番大切と言ってもよい食事について考えてみると、食欲不振を訴える患者の多い事が注目される。そして、放射線治療とともに化学療法も併用される事が多いため、食欲不振の出現は一層避けられないものになってきている。各個人の生活環境、食生活が入院によりかなり大きく変化する事をふまえて、過去6年間に放射線治療を受けた患者を対象に「食欲不振」について統計をとり、それらの原因となるものを探り、治療の援助をしていくためのアプローチとしてそれぞれの角度から考察し、今後の看護に役立てていきたい。

〈方 法〉

昭和48年から昭和53年までの6年間に放射線科へ入院し、放射線治療を受けた患者385名について、7項目に分け食欲不振を中心に統計をとる。

〈考 察〉

385名中128名(33.2%)の患者が食欲不振を訴えていたが、それらの考察である。

1 照射部位について(資料の項目2)

胸部の項目には縦隔、鎖骨窩、腋窩などの照射も含まれるが、食道、腹部など消化管の照射に食欲不振を訴える患者が多くある。肺に照射した患者にも47.1%と食欲不振を訴える患者が多いが、これらの患者の68.8%と多くが化学療法を併用している事もあり照射部位からの考察は難かしいが、肺、胸部の照射野として消化管も含まれるためとも考えられる。また頸部など口腔内に照射を受ける患者に食欲不振患者が多いとみていたが、口腔内の荒れなどの局所症状からくる食事摂取困難はあっても、食欲不振を訴える患者が案外少ない事がわかる。

2 照射線量について(資料の項目3とグラフ参照)

グラフは、個人の照射全線量中に食欲不振を訴えていた時期を黒く示したものであるが、初期から訴えているのは局所症状より全身症状と考えてよいと思う。全体的にみると、多く照射した方が多数の患者に食欲不振が見られると思ったが、意外に照射全線量の初期1,000 Rad までにほぼ半数の患

者が食欲不振を訴えている。中でも腹部など消化管にかかる者は初期から最後まで訴える者が多い。局所的な晩発症状として味覚がなくなったり、痛みのための嚥下困難により食べられない事もあり、これらは照射の後半にみられている。そして照射日数も長期になると患者自身精神的な影響を内外から受け不安など持つ事により食欲不振を生ずるとも考えられる。

3 性格について（資料の項目4）

放射線治療を受ける患者の中で性格的なものをみると、神経質な患者が食欲不振を多く訴えると考えていたが、実際は訴えない患者の中にも神経質な性格をもつ者がある。はっきり分ける事は難しいが、「神経質」から「ガンコ」までの群と「温和、人が良い」から以下の群に分けてみると、やや神経質群が多く、そういう人が「食欲不振になりやすい傾向にある」とみていいと思う。但し、その結果が本来の性格であるものか、病気により神経質になりその不安のため食欲が減退したものかははっきりしない事や、看護日誌からの資料なので不明瞭な点がある。しかし看護日誌も繰り返しの検討により最近では詳しい情報が得られるようになってきている。

4 年齢・性別について（資料項目4）

高齢者の入院が多い中で「長年の家の味に慣れているため、病院食が合わずに食欲減退がおこってくるのではないだろうか」とみたが、食欲不振のある割には「無理して食べている」事もあり、食分量としてはあまり低下していない事がわかった。男女を比べてみても特に差はないようである。

5 血液像について（資料の項目6）

放射線治療中の血液の変化をみると、白血球数の増減に著明に反映されている。照射開始時より一度減少し、放射線治療を受けながらも徐々に回復する場合が多くある。資料のグラフは昭和50、52、53年の一部の患者の白血球数を表したものである。照射開始後食欲不振が出現した頃の白血球数を左下がりの斜線で、照射終了した時点での白血球数を右下がりの斜線で示しているが、左側のように回復する場合と、中には右側のように更に減少した場合があった。

血液化学の変化は、全身衰弱が激しく死を目前にした患者にみられただけで、照射の経過中にはあまり変動はなかったので省略する事にする。

6 化学療法について（資料項目7）

放射線治療に加え化学療法併用の患者には当然の事のように白血球数の減少がみられる。食欲不振の訴えのある患者の79.8%と多くが化学療法を併用しており、PSK、ブレオマイシンなど使用の場合食欲不振を訴える患者が多く、治療中の全身の観察と管理が必要である事を認識した。

<まとめ>

以上の事などから、放射線治療に際しては不安を与えないように精神的な援助を考慮しながら照射時のオリエンテーションを工夫する事で少しでも食欲減退を少なくする事ができると思う。放射線治療の経過中に体力の増強をはかり治癒を早めるよう、食事のオリエンテーション、食事変更など最善の処置をとるようにし、対症的にも含嗽、蒸気吸入、鎮吐剤と薬など実施する事で、現在でも少しずつそれらの改善がみられている。また医師と連絡を密にする事により、照射の反応の強い患者には一時中止し炎症などが治まるまで照射を休ませたり、補液を行ない体力を維持させる事で精神的安楽をはかり、少しでも意欲を向上させる事ができると思う。

<最後に>

実際の看護の流れの中で1人1人の嗜好；食環境を考え実施していく事は時として難しいが、今回の研究を総括していく事で今後の食事指導、照射時のオリエンテーションなど様々な新しい課題とし今後

の看護に生かしていきたい。

<参考文献>

- 放射線医学：小林敏雄編 日本医事新報社
 放射線診療と看護：安河内浩著 医学書院
 癌と放射線治療：重松康夫著 南山堂
 新しい放射線看護の実際：山下久雄編 医学書院
 食事摂取への援助：看護技術 S 47年 8月

放射線科における食欲不振について

統計の中から

中病棟 6階

- ① 患者数 (S 48～53年)
 食欲不振のある患者
 ♂ 70名 } 128名 (33.2%)
 ♀ 58名 }
 食欲不振のない患者
 ♂ 144名 } 257名 (66.8%)
 ♀ 113名 }

② 照射部位について (S 48～53年)

※胸部=含縦隔・鎖骨窩

照射部位 年代	頭部	頸部	食道	肺	胸部	腹部	上下肢	割合
0～10代	2	2				1		5名 3.9%
20代		1			2	1		4名 3.1%
30代	1	1		2	1			5名 3.9%
40代	1	3	2	2	2	3	2	15名 11.7%
50代	3	4	3	7	7	6		30名 23.5%
60代	3	7	13	7	3	8		41名 32%
70代～	2	6	11	6	2	1		28名 21.9%
計	12名	24名	29名	24名	17名	20名	2名	128名
訴えのある 放射患者	29.3%	25.8%	33.3%	47.1%	29.3%	40.0%	28.6%	33.2%

③ 照射線量について (S 48～53年)

※胸部=含縦隔・鎖骨高

照射部位 線量	頭 部	頸 部	食 道	肺	胸 部	腹 部	上下肢	割 合	
0～500	3	5	7	10	4	10		39名	30.5%
501～1,000	2	6	4	5	1	3		21名	16.4%
1,001～1,500	1	5	6	3	4			19名	14.9%
1,501～2,000	2	3	1	1	3	3		13名	10.2%
2,001～3,000	1	3	4	2	3	2		15名	11.7%
3,001～4,000	1	2	2		2	1	2	10名	7.8%
4,001～5,000	2			2		1		5名	3.9%
5,001～6,000			4					4名	3.1%
6,001～			1	1				2名	1.5%
計	12名	24名	29名	24名	17名	20名	2名	128名	
訴えのある者 放射患者	29.3%	25.8%	33.3%	47.1%	29.3%	40.0%	28.6%	33.2%	

性 格	訴えのある患者		訴えない患者	
神 経 質	23名	35.9%	22.2%	28名
小心・内向的	7名	10.9%	8.7%	11名
几 帳 面	4名	6.3%	4.0%	5名
短 気	3名	4.7%	6.4%	8名
ガ ン コ			7.1%	9名
温和・人が良い	16名	25.0%	15.9%	20名
気長・のんき	6名	9.4%	11.9%	15名
明 る い	2名	3.1%	9.5%	12名
はっきりしている	2名	3.1%	3.2%	4名
がまん強い			4.7%	6名
ふ つ う	1名	1.6%	6.4%	8名

④ 性格からみた場合

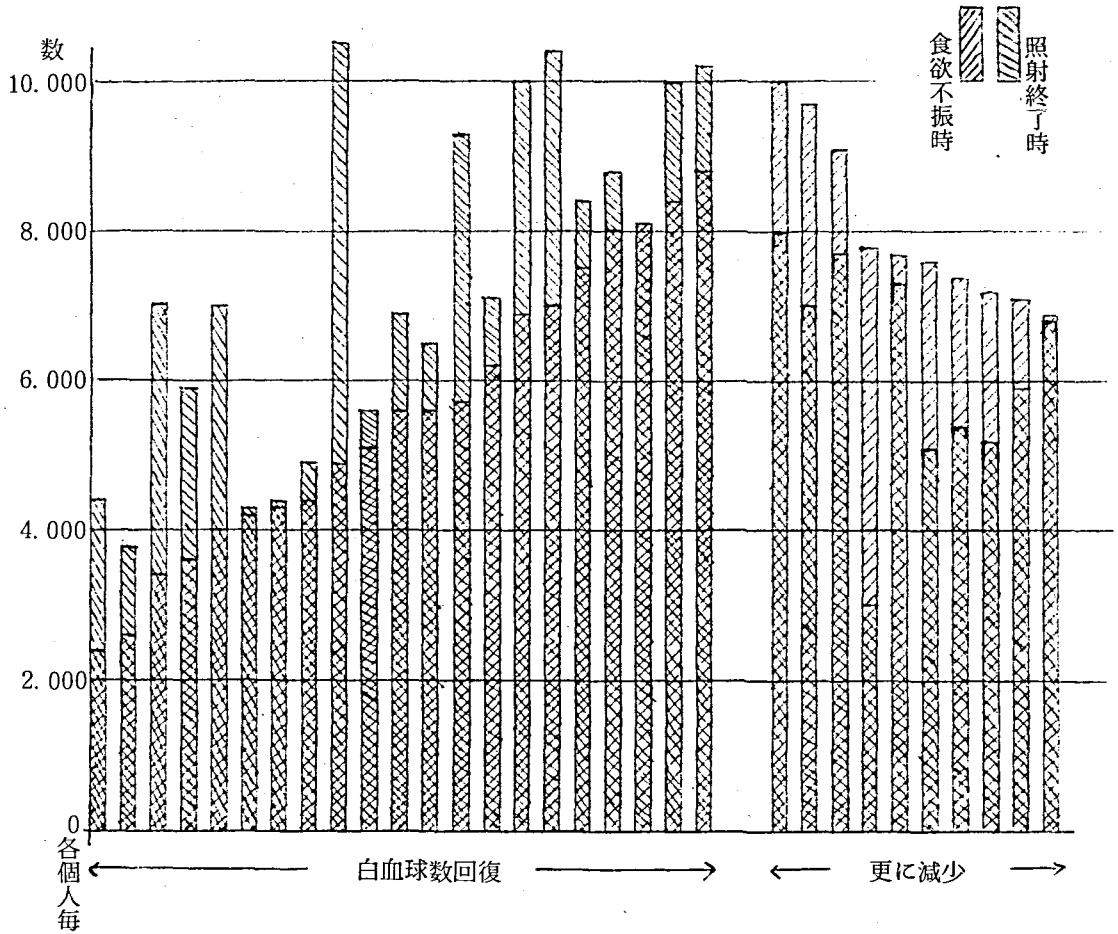
(S 51～53年)

⑤ 年令別・性別にみた場合

(S 48～53年)

年 代	訴えのある患者		訴えない患者	
	♂	♀	♂	♀
0～10代	5		1	4
20代	2	2	4	3
30代	2	3	2	7
40代	5	10	13	20
50代	15	15	32	25
60代	26	15	41	28
70代～	15	13	51	26
計	70	58	144	113
	128名		257名	

⑥ 白血球数の変化（食欲不振時～照射終了）（S 50.52～53年）



⑦ 化学療法剤の分類（S 52～53年）

化学療法	訴えのある患者	訴えない患者
PSK	15	12
プレオマイシン	13	1
5Fu-D.S	12	2
フトラフル	9	3
ピシバニール	8	2
FAMT	4	
FCMT	3	
METVFC	3	
エスキノン	3	
オンコピン	2	
VEMP	1	2
その他（9種）	10	3
	83 / 104	25 / 90

食欲不振を訴える患者の
79.8%が化学療法併用

食欲不振を訴えない患者
の27.8%が化学療法併用

